

IAPS に関わって

古瀬敏 静岡文化芸術大学

はじめに

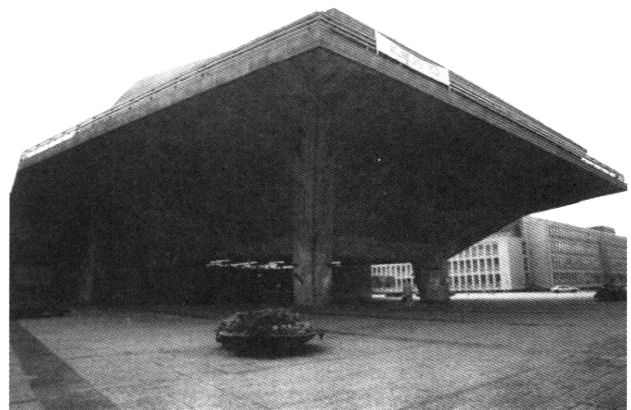
しばらく前に IAPS の会員を番号順で確認できるリストが完成したようで、2011年秋に送ってきたのを覗いてみてびっくりしたことがある。会員番号100番までに8人、200番まででも12人しか残っていないのだ。この番号は会員になった順に割り振られているので、設立当初からといてもいい会員が200番くらいまでに入っていると推察されるが、9割以上が止めているというのは意外だった。(ちなみに番号は2300くらいまで進んでいて、そのうち770人くらいが現行会員のようだ。)

もちろん、IAPS 設立時点で相当な年配の会員もいたはずで、それにできてから30年も経つものだからある程度欠けていくのはやむを得ない(亡くなった研究者もいる)が、それにしても、という感慨を抱いた。その100番までに舟橋國男、古瀬敏の2名が、また103番として大野隆造がそれに加わっている(現役番号では先頭からちょうど10番目)。10名のうちに日本人が3名残っているのは立派というか、それとも大胆に専門分野を変えたりしない日本人の用心深さが表れているというべきか、さてどちらだろう。いずれにしても興味深い。(なお、途中から IAPS、EDRA、MERA、そして PAPER の会員は互いに会員扱いで国際会議参加登録費の割引が導入されたので、日本人にとってはとくに IAPS の会員になるメリットがなくなったかもしれない。)

参加で新しい経験をする

筆者が会員になったのはたしか1981年であるが、1982年の大会には参加できず、最初に参加したのは論文を出した1984年、西ベルリンで行われたときだった。このときにはちょっとがんばって、国際会議終了後に東ベルリンを経由してヘルシンキに飛び(当時は西ベルリンからは直接飛べないが、東ベルリンからならフィンランドに直接飛べるといふ、東西冷戦に伴うベルリンの壁が存在した時代)、そこからストックホルムに船で渡ったら、なんと王立工科大学(KTH)に留学中だった外山義さんに会うという成り行きとなった。

1986年にイスラエルのハイファで行われた大会には出なかったが、1988年デルフト、1990年アンカラ、1992年テッサロニキ(ネオス・マルマラス)、1994年マンチェスター、1996年ストックホルムと継続して参加した。研究所での役割がちょっと重たくなった1998年と2000年には出られず、しかし2002年スペインのラ・コルニャには他の用事と組み合わせで何とか参加することができた。これがじつは今日までのうちで IAPS 大会に参加した最後となっているが、その理由は2003年に大学に移って、同時にいくつかの ISO 作業に加わったので、どちらを優先させるかを選ばざるを得なくなったことによる(ほとんどの場合に夏休み前、日本ではまだ前期学期の最中に



デルフト 会場はデルフト工科大学の Aula という建物。まるでカエルみたいと誰かが言った。IAPS10 という幕が張られていた。



デルフト 講堂の大きさに比して、参加者は多くない。

IAPS が行われるので、大学での休講回数をむやみに増やせない状況では、こちらのわがままは通しにくい。

なお、2002年のラ・コルニャで外山義さんと遭遇した。彼は論文発表者ではなかったはずで、事前リストには名前がなく、それゆえ会うとは予想していなかった。彼は大会開催の前日、何をするか迷った



アンカラ 全体セッションでの講演。ここで讚井さんとの連名論文を発表した。



アンカラ 当時の役員メンバーたち。



マンチェスター 火災警報に対して慌ただしく避難を開始したものの、外に出たら出口をふさぐようにたまっていても気にしていない。

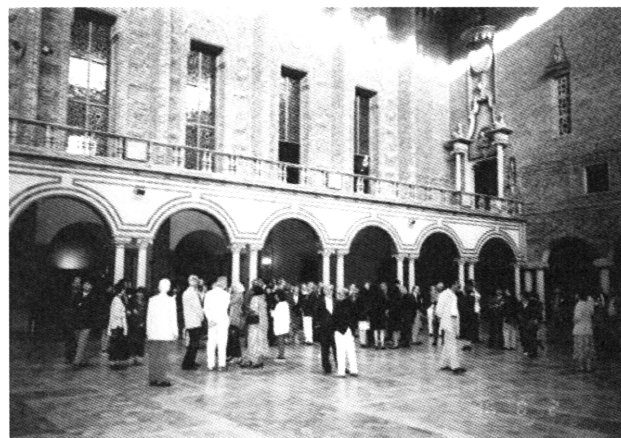
あげく、カナダの知人といっしょに慌ただしく巡礼聖地であるサンチャゴ・デ・コンポステーラ詣でに出かけていった（私は彼と異なって地元を見て回る選択をし、サンチャゴ・デ・コンポステーラ行きをパスした）。かれが急死したのはそのちょっと後、11月初旬だった。その知らせを筆者はISOの会合に出ているウィーンのホテルで知った。だからある意味



マンチェスター レセプション会場で。右寄り一番前の女性がアーザ・チャーチマン。



ストックホルム 理事会の風景。



ストックホルム 市庁舎でレセプション。



ストックホルム 見学会の行われた市議会会議場の席の座り心地を確かめる参加者たち。



ラ・コルーニャ 理事会の風景。



ラ・コルーニャ 理事会の夕食会。右手前のアンドリュエー・ザイデルと筆者はこのときに理事を卒業した。

では、筆者と外山さんとは国内／国外関係なくあちこち動き回っていた仲間ということもできる（あるとき、KLM を利用して成田からロンドンに行く途次、飛行機が動き出した後でトラブルが見つかって誘導路で修理という羽目になり、飛び立つのが6時間ほど遅れ、結果として多くの乗客は乗り継ぎが不可能になって、アムステルダムで1泊する羽目になった

ことがあるのだが、そのときになんと外山さんはストックホルムに行くとかで同じ便に乗っていて、けっきょく航空会社が手配した同じホテルに泊まったことがある。それくらい不思議な縁があった）。

理事となる

筆者は1994年から2002年まで理事会メンバーだった。国際学会である以上、理事メンバーは所属会員の居住する地域をある程度代表すべきなのではないかと考えたので、ヨーロッパ以外という立場を意識して立候補に至った次第である。そのときまでは皆勤に近い参加状況だったので、新参者ではなくてそれなりに知名度があり、MERA を代表するような形で全体セッションでの講演もしたりしていたから、若造というほど若くなかったこともあって他の国の会員からの推薦も得られた（たしか2名の推薦人がいないと立候補できない）し、選挙では当選した。もっとも理事といってもさすがに地理的距離の問題があり、おまけに理事会関連会合参加旅費は自分で調達せざるを得ないから、大会開催時以外にはそういった会合に参加することは不可能で、役員として特別の役割を果たすには至らなかった。

筆者が理事メンバーになったのは、一つには2年に1度のIAPS 大会を日本で開催する可能性を探ることだったのだが、論文を発表する大学院学生が旅費（航空賃＋滞在費）を用意できない場所には大会を持って行けない、というヨーロッパの各大学の指導教員たちの強い意向があって、けっきょくは議論の俎上にも上らずに終わってしまった。日本への往復航空賃はディスカウントだとさほどでもないのだが、滞在中の宿のことがネックだった。言葉に不自由しない宿はそれなりに高くつくし、またヨーロッパなどでは使える学寮が日本では当てにできない一般的な秋入学の大学だと、夏休みには学生が出て行って寮が空になるので、1泊2千円か3千円で泊まれる。IAPS の会議自体では寮に泊まった記憶がないが、他の国際会議では泊まったことがあり、また1984年にフィンランドとスウェーデンに回ったときには、オタニエミ工科大学での宿は学生寮だった。

筆者が理事だったときに強く主張して学会運営に関して導入できたことが一つある。それは年会費のクレジットカード払いの導入である。それまでは送金小切手をつくって外貨を送るしかなかったのだが、日本からだとたかだか5千円程度送るのにほぼ同

額の手数料を銀行に払わねばならない。おまけに手間もかかる。これでは会員はちっとも増えないぞ、と説明して何とか道筋をつけた。はじめのころはクレジットカード決済には仲介業者に手数料を取られるとか、最低保証人数が確保できるかどうかわからないとか言って渋っていたが、最終的にはカード決済ができるようになった。(もっともこのおかげで、英国留学中に開設した銀行の小切手口座を送金に使わなくなって休眠状態となり、とうとう取り返し不能になってしまったのは誤算だった。残高は400ポンド程度だったので、まあ大損ではないが、むしろ為替レートがどんどん円高に変わっていったほうが実害は大きかった)。

論文採択と発表

最近はどうか知らないが、以前は IAPS では厳密な論文査読を行わなかった。基本的に誰でも発表歓迎、という方針だった。さまざまな議論ができるからである。その代わり、筆頭著者として出せる論文数に制限があった。これは全体の発表論文数を枠に納めざるを得ないからだが、とは言っても、ワークショップやシンポジウムに加わる場合はその制限は枠外になるので、何度か登壇する機会がある発表者が出るのはやむを得まい。また共著となると、じつは旅費とか日程の都合で参加できない場合も出てくるので、現実には複数の論文を代読で発表する人間もいた。査読無しだから、何本発表しても厳密には実績にはならないわけだが、練習の場としては手ごろ、と割り切っていたのではないか？ そのことを考えると、ヨーロッパから日本に来るには大金を払うのだから、査読ありで査読をパスして発表を認められたという証明が欲しかったのかもしれないが、きちんとした査読プロセスを導入しようという提案は理事たちからは出なかった。

たまたま2012年10月、筆者は論文審査委員の立場で関与するかたちだったが、福岡で第4回国際ユニヴァーサルデザイン会議が開催された。論文査読で最終的に口頭発表ではなくポスター発表に回されたのに対して、土壇場まで必死になって口頭発表に格上げしてくれと何度もメールを送ってきた発表者がいた。多くの場ではポスター発表は口頭発表に比べて一段低く評価されるのでいわば死活問題だったと推察された。これまでの会議に比べると査読者が厳しくなって、採択論文のほぼ半分をポスターにしたの

で、以前であれば若干詰めの甘い論文でも口頭発表の機会を得られる可能性は高かったと思うが、今回はそうではなかったのはその投稿者にとっては誤算だったのだろう。

筆者は、対外的な発表の場を国内ではなく海外に選ぶことで、いつもとは違う聴衆とのやりとりができることを評価し、かつ大手を振って外国旅費をもらえるから、できるだけ国際学会に論文を出すようにしていた。査読があることを旅費支給条件として厳しくすると、2国間の協力活動に伴うワークショップなどでは厳密な査読無しということが多いため、それにも旅費が出せなくなるから、厳密な査読無し、ということが旅費要請に不利には働かなかったのはありがたかった。

また、バブルのころだったか、外貨を使えという米国からの圧力があって、当時の国立研究所に外国旅費としての使い道を指定した予算が上積みされたので、それ以前のように数年に1回しか旅費がもらえないという状況が大きく改善されたのも、さまざまな国際会議に積極的に論文を出すインセンティブになった。もちろん為替レートがどんどん円高に変わっていった、外国旅費を予算要求で取れなくても数年に1回くらいなら自前で捻出して参加可能になったという事情も大きいと言える。

国際会議は論文発表のチャンス

多くの国際学会では、テーマから極端に外れていなければ一定数の聴衆が集まる。つまり興味を持つ参加者がそれなりの数だけいると判断されると、参加登録費を払ってくれる論文応募は大歓迎であって、事務局が応募論文を門前払いにすることはめったにない。先ほど言及した福岡での国際ユニヴァーサルデザイン会議は口頭発表の枠をかなり絞って通過した論文の半数をポスター発表にしたので、ある意味では例外的に厳しかったと言える。

発表は全部ポスターにして、口頭セッションは予め選定したテーマについての議論の場にする、そこで関連論文の著者が意見を戦わせるという仕掛けを筆者は以前から考えているのだが、学会は若い人の口頭発表の練習の場であると主張されると、それは一応の理屈なので、なかなか個別論文の口頭発表自体を全廃するのは難しい。司会者に予めセッションの論文を送って仕切りをしやすくするのはたしか IAPS でも試みられたと思うのだが、その先は論文数

のバランスの問題もあり、プログラムを組む側でも苦勞していることは指摘しておきたい。まるで孤児のようにぼつんと周りと無関係にセッションに入っている論文に気がつかれたことがあると思うが、それにはちゃんと訳があるのである。

おまけーときどき起こること

国際会議に何度も参加していると、開催都市の市庁舎でのレセプションが目玉であることがけっこうある。たいてい由緒・格式がある建物だ。ただし出るものはアルコールと若干のつまみで、食べ物が豊富であることはまずない。そこに入れることがある意味で価値があるというふうに理解されているからだと思う。IAPS 以外の国際会議も含めると、ストックホルム市庁舎（ノーベル賞授賞式の会場）、オスロ市庁舎、パリ市庁舎、モントリオール市庁舎などに入ったことがある。残念ながら、わが国ではそれに匹敵するような現役庁舎がほとんど存在しないので、レセプションはたいてい会場の一角か、あるいは

ホテルなどで行われるが、何とか工夫したいところである。

あと一つ、マンチェスターでの IAPS では全体会議中に火災警報が鳴って屋外に避難させられたが、そのときに、建物から十分離れた安全なところまで移動しない君たちは専門家として失格だぞ、と避難安全の研究者があきれて指摘したのを覚えている。筆者は他の人たちよりは離れたところまで移動したが、それは後から出てくる人の流れを邪魔しないためというきわめて自然な理由からであったが、英国ではもっと切実な事情があって、北アイルランド闘争関連で爆弾が仕掛けられることも可能性としてはあり得たのだ。実際にはぼやだったようだが、仮に放火だと避難経路をふさぐように入念に仕掛けられることだってあり得る。なお筆者の経験した避難は、確かヒースロー空港で1回、マンチェスターのホテルで1回（IAPS の時ではなかった）ほかであるが、なぜか英国が際立っている。